シネ倶楽部

「マナカマナ――雲上の巡礼」
（ハーヴァード大学 感覚民族誌学ラボ 傑作選）

原題：MANAKAMANA

2013年／ネパール・アメリカ／日本語字幕あり／118分
監督：ステファニー・スプレイ、パチョ・ヴェレズ
DVDあり

単調な構図が生む豊潤な沃野

南真木人
民博 グローバル現象研究部

マナカマナ参詣

中部ネパール・ゴルカ郡の山中約一二〇〇メートルの尾根上に、マナカマナ（心のなかの願望）とよばれる寺がある。人びとは古来、ここの女神に供物を献じて願をかけ（バッカル）、成就すれば生贄のヤギやニワトリを捧げて、お礼参りをしてきた。マナカマナ参詣（ダルサン）は、バルタ・ティルタ（断食巡礼）ともよばれ、麓から寺まで徒歩で約三時間のつづら折りの斜面を登る苦行をともなった。わたしも調査村の人と歩いて行ったことがあるが、額に汗して辿り着いた尾根に延びる参道と宿場町は別世界のようにまばゆく映り、女神のご利益もいくばくかと思ったものだ。

ところが、一九九八年、ここに西欧製のロープウェイ（ネパールではケーブルカーとよぶ）が敷設され、もの一〇分で尾根に上がれるようになった。巡礼の苦行は過去のものとなって久しいが、それによって人びとの信心や女神のご利益が減じたという話は聞かない。

感性に委ねられた映像と音響

映画「マナカマナ」は、このロープウェイのなかに固定したカメラが、供犠獣として売られる荷物キャビンに載せられたヤギを含む、一〇組の乗客（とヤギ）の一〇分間をひたすら写し、それらをつなげた映像で構成される。前半の上りと後半の下りで、それぞれカメラを上向きと下向きに固定した映像があるので、構図としては四パターンある。だが、何れもロープウェイのなかと窓からの景色が延々と映し出されることに変わりなく、マナカマナ寺が映るわけでもない。

初めて乗るロープウェイに表情が強張ったままの無言の祖父と孫、供物を手に固唾をのむ中年女性、気分が高揚し同行者に神話を語る老女、写真を撮りながら、はしゃぐ若者たちなど、一〇組はそれぞれに魅力的だ。唯一、上りと下りの両方に登場する夫婦は、参詣を終えて緊張が和らいだのか、復路は往路よりも少し饒舌になる。大事そうに抱えていたニワトリも、帰りは逆さの縛られた足だけが映り、儀礼が滞りなく終わったことを暗示する。

参道で売られている供物と土産物の首飾り（1998年）

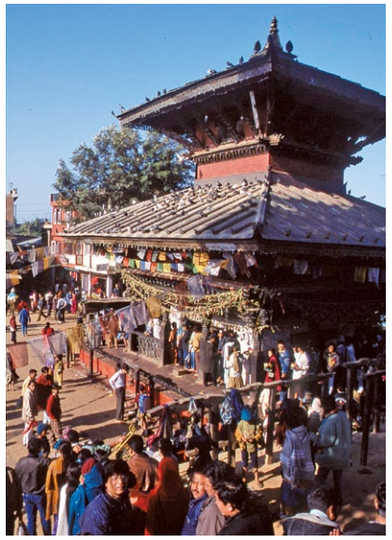
映画の断片のような家族旅行
（ただし、これはマナカマナではなく、カトマンドゥ盆地外輪山のチャンドラギリ・ヒルズのロープウェイ、2017年）

視聴者の多くは、そうした情景に何らかの意味や作品の意図を探ろうと、乗客の表情と動きを追い、会話に耳をそばだてるだろう。だが、やがてそれは無意味で、作品の意味は視聴者それぞれの胸中や感性に委ねられていることに気づかされていく。そして、それに気づくころには、圧倒的な量で迫る鳥の鳴き声や虫の音の大きさに耳を奪われ、サラノキ林から高度を上げてマツ林に変わる景色や眼下の村のトウモロコシ畑と相まって、ネパールの山の懐深さを感じはじめるだろう。さらには、乗客のさまざまな反応をとおして、そこに暮らす人びとの生活の機微に思いをはせるに違いない。

感覚民族誌学

乗客役の出演者は何れも、監督の一人で文化人類学者のスプレイが調査する村の人びとや彼女の友人（ツーリスト役の米国人）であり、監督二人もロープウェイに同乗し、カメラ側にいたことが映画の公式プログラムのインタビューで明らかになる。それを読むまでは、てっきり無人カメラが写した映像だと思ったが、それほどまでに乗客の態度や表情からは、カメラのレンズやスプレイらの存在を感じさせない。つまり、この作品はフィクションなのだが、台本が用意されていたようには見えない、素人による意図せざる「演技」がドキュメンタリーを凌ぐほどの現実味を帯びて、視聴者に何かを感じさせ、何かを考えさせる。しかも、その何かとは自由で開かれたものであり、パターン化した衝撃的な構図とは裏腹に、監督の主張や作品の意図を提示することを頑なに拒む。

じつはこの作品は、ハーヴァード大学人類学部の「感覚民族誌学ラボ」から生まれたものだ。一言でいえばそれは、ことばによる説明を排除した、感性や感覚に訴えかける実験的な映像と音響のプロジェクトである。鳥の鳴き声、虫の音、ロープウェイのロープが軋む音や鉄塔に差し掛かったときのノイズ、供犠を想起させるヤギの泣き声と寺の鐘の共鳴音など、ここで聞こえる音は、研ぎ澄ました感覚をしてはじめて聞こえてくる類のものだ。映画「マナカマナ」には、感覚民族誌学を名乗る、民族誌映画へのあらたな刺激的な挑戦が凝縮されている。


参拝の順番待ちの列ができるマナカマナ寺（1998年）